上岩田遺跡15

－福岡県小郡市上岩田・井上所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第３２１集

２０１８

小郡市教育委員会

上岩田遺跡15

－福岡県小郡市上岩田・井上所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第３２１集

２０１８

小郡市教育委員会

序文

本書は、小郡市上岩田・井上地内における駐車場建設に先立って、小郡市教育委員会が平成 28 年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

本遺跡が所在する小郡市上岩田には、国指定史跡上岩田遺跡があります。この遺跡では、17,000㎡を超える範囲が史跡に指定され、7 世紀後半の「評」段階の官衙遺跡として、全国的に注目されています。今回、発掘調査を実施した上岩田遺跡 15 は、この史跡指定地から約 120m に位置する同一の遺跡です。

本調査では、古代の集落を中心とした遺構が見つかり、台地の縁辺部まで集落が展開している様子が確認されました。今回得られた成果が今後永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後になりましたが、開発の事業主体である株式会社トヨタユーゼック、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 30 年 3 月 30 日

小郡市教育委員会
教育長　清武 輝

例言

1．本書は、株式会社トヨタユーゼックによる駐車場整備に伴い、小郡市教育委員会が平成 28 年度に実施した上岩田遺跡 15 次調査の発掘調査記録である。
2．上岩田遺跡 15 の発掘調査は、駐車場整備に先立ち、小郡市上岩田・井上の 589.8㎡において調査を実施した。
3．遺構の実測については、龍孝明が行った。製図は宮崎美穂子が行った。
4．遺構の写真撮影は龍が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5．遺物実測は近藤可奈、龍が行い、製図は久住愛子が行った。
6．遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第Ⅱ系による。
7．遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
8．本書の執筆は龍が行った。

＜本文目次＞

第１章　調査の経過と組織…… 1
　１．調査の経過
　２．組織
第２章　位置と環境…… 2
第３章　遺跡の概要…… 4
第４章　遺構と遺物…… 4
　１．Ａ区の遺構と遺物 …… 4
　　１）竪穴住居跡
　　２）掘立柱建物
　　３）土坑
　　４）不明遺構
　２．Ｂ区の遺構と遺物…… 15
　　１）竪穴住居跡
　　２）土坑
　　３）溝
　　４）不明遺構
　３．Ｃ～Ｇの遺構と遺物 …… 21
第５章　調査の成果…… 21
　１．蔵骨器
　２．谷部

＜挿図目次＞

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）
第２図　調査区配置図（S=1/1,000）
第３図　Ａ区遺構配置図（S=1/250）
第４図　５号住居跡、２・３号土坑実測図（S=1/40）
第５図　掘立柱建物・土坑実測図（S=1/40）
第６図　Ｂ区遺構配置図（S=1/200）
第７図　４・６号住居跡実測図（S=1/40）
第８図　５号溝・２号不明遺構実測図（S=1/40）
第９図　Ａ区出土土器実測図（S=1/4）
第10図　Ｂ区出土土器実測図（S=1/4）
第11図　上岩田遺跡全体図（S=1/1,500）

＜図版目次＞

１－１　調査区全景（西から）
１－２　調査区遠景（西から）
２－１　Ａ区全景（上空から）
２－２　Ｂ区全景（上空から）
３－１　１号住居跡（東から）
３－２　２号住居跡（東から）
３－３　４号住居跡・５号土坑（北東から）
３－４　６号住居跡（東から）
３－５　６号住居跡土層（北から）
３－６　１号掘立柱建物（南から）
４－１　１号土坑（西から）
４－２　１号土坑土層（西から）
４－３　３号土坑（西から）
４－４　３号土坑土層（西から）
４－５　３号土坑土器出土状況（南から）
４－６　５号土坑土層（北から）
５－１　１号不明遺構（南東から）
５－２　１号不明遺構土層（東から）
５－３　５号溝・２号不明遺構土層（南東から）
６　出土遺物
７　出土遺物
８　出土遺物

第１章　調査の経過と組織

１．調査の経過

上岩田遺跡の発掘調査は、平成７年から平成10年度にかけて実施された上岩田工業団地造成事業に伴い調査された「上岩田遺跡」の北西側120mに位置する。調査地点の一部は、平成23年度に刊行した『国指定史跡　小郡官衙遺跡群　小郡官衙遺跡・上岩田遺跡　保存管理計画書』で策定された追加指定検討範囲のC区にあたる。

平成28年5月25日付で照会文書（事前審査番号16023）が提出され、申請地の試掘調査を実施。その結果、一部に遺構・遺物が確認されたことから、発掘調査が必要な旨を回答した。

なお、発掘調査にあたっては、平成23年度に策定された保存管理計画に基づき、重要な遺構が検出された場合は、遺跡を保護し、追加指定を検討する可能性がある点を事前協議において説明し、快諾いただいた。この協議の結果、通常の発掘調査を実施した。

以下調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

８月１日　重機による表土剥ぎ開始。
８月２日　作業員投入。遺構検出・掘削開始。表土剥ぎを併せて実施。
８月12日　東西トレンチ撹乱掘削完了。遺構掘削開始。
８月18日　１号不明遺構掘削。３号土坑下層から壺出土。蔵骨器か。
８月25日　B区遺構検出。A区の実測。
９月６日　全体清掃
９月７日　B区清掃。空撮を実施
９月８日　A区のレベル入れを開始
９月14日　１号不明遺構土層図面作成
９月15日　B区完掘。C～G区の空中写真撮影、埋め戻し開始
９月20日　完全撤収。調査完了

２．組織

上岩田遺跡15の調査体制は以下のとおり。

＜平成 28 年度＞
現地発掘調査
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　山下博文
文化財課　課　長　片岡宏二
係　長　柏原孝俊
技　師　龍　孝明

＜平成 29 年度＞
整理・報告書作成
小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部　部　長　山下博文
文化財課　課　長　柏原孝俊
係　長　杉本岳史
技　師　龍　孝明

第２章　位置と環境

福岡県は九州本島の北部に位置し、関門海峡を隔てて本州西端に隣接する。周防灘・響灘・玄界灘・有明海の４つの海に面し、それぞれ瀬戸内海、日本海、東シナ海へとつながることから、古代より日本と大陸とを結ぶ行政、交通の要衝であった。現在の県域は明治９年（1876）に福岡・三潴・小倉三県の合併により成立した。小郡市は、福岡県の中央部、筑後平野の北端付近に位置している。古来から筑前と筑後、肥前を結ぶ交通の要衝であり、文化的にも重要な位置にあたる。市の北西部から西部にかけては、背振山系から派生する丘陵が連なり、三国丘陵と呼ばれる。地質は花崗岩風化土で浸食されやすいため、各所に雨水などによる浸食で谷部が形成されている。市内中央部付近を筑後川の支流である宝満川が南北に貫流しており、多くの小河川がこれに流れ込んでいる。これら河川によって形成された広大な平野部が市の東・南部に形成されている。

御原郡における官衙遺跡として考えられるものとして、**小郡官衙遺跡**（推定御原郡衙）、大刀洗町下**高橋官衙遺跡**（推定移転郡衙）のほか、前述の**上岩田遺跡**、**大板井遺跡**などが挙げられる。当遺跡が存在する台地上には、干潟地区や上岩田地区に代表される奈良時代前後の遺構が広範囲に分布している。

白鳳時代には上岩田廃寺が創建されるが、天武7（678）年に発生した筑紫大地震によって倒壊した可能性が指摘されている。金堂と推定される18.5×16mの規模を測る基壇には版築が確認でき、周囲の整地層には倒壊した瓦片などが散乱していた。基壇の北側では、整地層を掘りこんで大型の掘立柱建物が建てられ、9世紀前半代まで継続する。

宝満川の左岸、上岩田遺跡の北西500mに所在する井上廃寺は、昭和36年に小田富士雄氏によって、方２町の寺域復元案が提示されている。出土、採取された古瓦は畿内山田寺系種先瓦をはじめ、高句麗、百済、大宰府系の各種瓦で、創建時期は８世紀初頭頃と推定される。**上岩田遺跡**では同型品が出土するが、他の瓦当文を伴出しない単純組成であり、井上廃寺に先行する寺院として基壇建物が重要視される。**小郡官衙遺跡**は、現在の小郡市中心部に位置し、官衙周辺の集落や官道の調査が進展しており、当時の総合的な地域史を論じることが可能となりつつある地域である。

上岩田遺跡の南東には大刀洗町**下高橋官衙遺跡**が位置し、その東には官衙の続きと考えられる**下高橋馬屋元遺跡**が位置する。また、近接して小郡市側には平成２年度に発掘調査が実施された**下岩田南諏訪遺跡**が浅い谷を挟むが、隣接する台地上に立地しており、８世紀前後の掘立柱建物や土坑が検出されている。１号建物のピットからは須恵器坏蓋の転用硯が出土している。近年、当地周辺の動向が次第に明らかになりつつある。

干潟城山遺跡は、７世紀中頃から８世紀後半代にかけての集落が形成される。**干潟城山遺跡**では竪穴住居が主体であり、掘立柱建物は2×2間規模の総柱建物で構成される。竪穴住居のカマドはオンドル状のものが多く見られ、渡来系集団の存在を示唆している。**干潟遺跡**では、７世紀後半の廃棄土壙から金製の小玉が出土している。掘立柱建物は８世紀前半に出現し、大型の側柱建物があるが、倉庫と考えられる総柱建物は2×2間と小型である。この時期の集落は竪穴住居を中心に構成される。

この時期の集落は、小郡市全域に見られ、小郡官衙遺跡を中心として、大板井遺跡、**小郡前伏遺跡**、**小郡若山遺跡３**で住居跡や掘立柱建物が、**小郡堂の前遺跡**、**小郡正尻遺跡**で溝が検出されるなど、普遍的に存在するようである。**津古生掛遺跡**は、やや時期幅はあるが、百軒を超える住居跡で構成されている。自然地形の斜面を整地して集落を築くという特異な例である。

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）

第３章　調査の概要

本調査区における遺構面の標高は、調査区東側で18.0m、西側で17.0mを測る。ただし、東側の指定範囲からは最大で1.2mほどの段を有し、既に削平を受けていることが明らかであった。本来は、東側が高く、緩やかに西側へと傾斜する台地の縁にあたると考えられる。調査区は、削平を受けている台地部分と西側の低地部分とに分かれる。台地上は南側をA区、北側をB区、西側の低地はC～G区として調査を実施した。各調査区の位置は第２図に記す。A区では、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物１棟、土坑４基、不明遺構１基、溝２条、ピット157基、B区では、竪穴住居跡３軒、土坑１基、不明遺構１基、溝２条、ピット63基を検出した。

C～G区は、工事による遺構面への影響が及ばないため、遺構検出は実施しておらず、トレンチ調査により、谷部の拡がりを確認するにとどめた。

第４章　遺構と遺物

１．A区の遺構と遺物

１）竪穴住居跡（SC）

１号住居跡（第３図　図版３－１）

２号竪穴住居跡に切られ、１号土坑を切る。平面プラン隅丸方形で、上面は削平されており、検出面から床面までは４cm程度しか遺存しない。南北2.56m以上を測る。西側に突出部があり、カマドが併設されていた可能性があるが、上面削平により詳細は不明。北壁には周壁溝が見られる。

出土遺物無し。

２号住居跡（第３図　図版３－２）

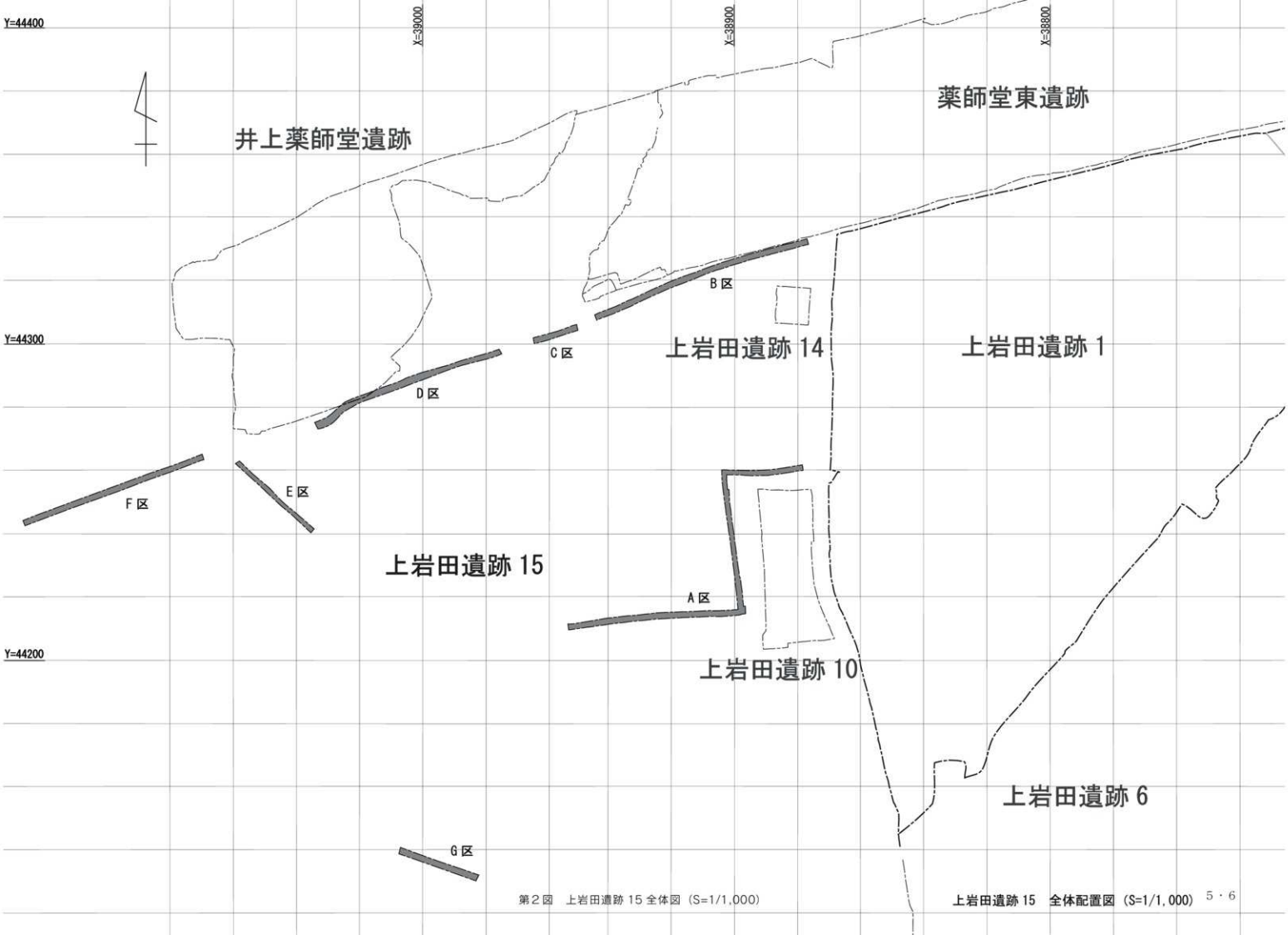
１号住居跡を切る。貼床のほとんどが削平を受ける。幅4.75mを測る。遺構としては、周壁溝の一部が遺存するのみである。検出面からの深さは最大で3cm程度である。

出土遺物無し。

５号住居跡（第４図　図版５）

１号不明遺構（SX01）として掘削した住居跡である。平面プランから住居跡２軒の切り合いの可能性がある。規模は不明である。貼床は確認できない。第４図の５～11層が該当する。

出土遺物は１号不明遺構で後述する。

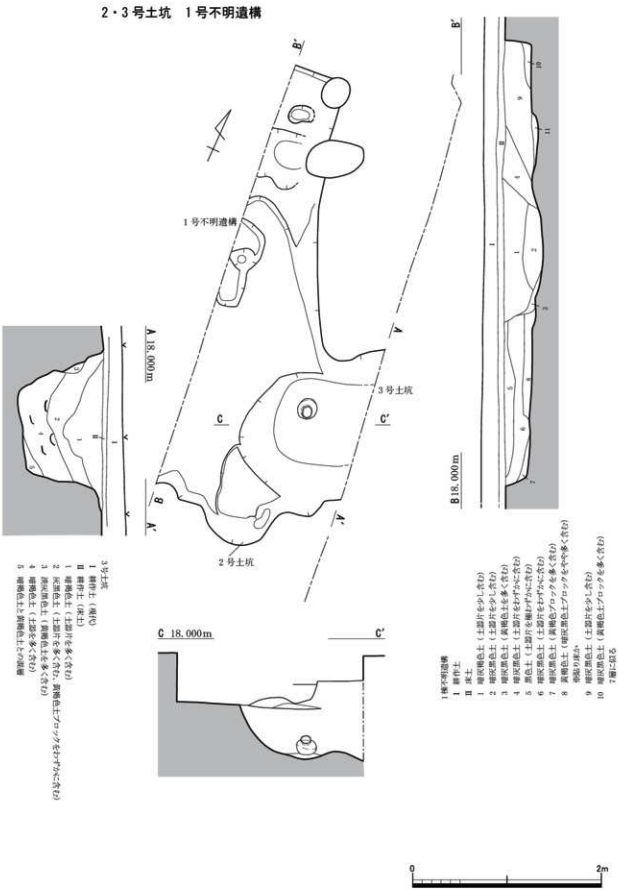


第２図　上岩田遺跡 15 全体図（S=1/1,000）

上岩田遺跡 15　全体配置図（S=1/1,000）

A 区遺構配置図（S=1/250）

第３図　A 区遺構配置図（S=1/250）



第４図　５号住居跡、２・３号土坑実測図（S=1/40）

2）掘立柱建物（SB）

1号掘立柱建物（第５図　図版３－６）

南北トレンチ南端で検出した1間×2間以上の掘立柱建物である。梁行2.0m、桁行1.1 ～ 1.2mを測る。調査区東側を一部拡張したが、続く柱穴は検出されなかった。

出土遺物無し。

3）土坑（SK）

１号土坑（第５図　図版４－１、２）

１号住居跡に切られる。平面プラン方形を呈し、床面は不整楕円形を呈する。西側辺は1.96m、検出面から床面までは80cmを測る。西側南北角には三角形状のテラスをもち、２段掘りの土坑であった可能性がある。埋土中には地山である黄褐色土のブロックが多く含まれており、人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。

出土遺物はいずれも小片のため図化し得なかった。

２号土坑（第４図　図版５－１）

切り合い関係が判断できず、SX01として掘削したため、平面プランは不明である。楕円形となろうか。残存する床面は５号住居跡床面から約10cm下がる。３号土坑に切られる。

出土遺物はいずれも小片のため図化し得なかった。

３号土坑（第４図　図版４－３～５、５－１）

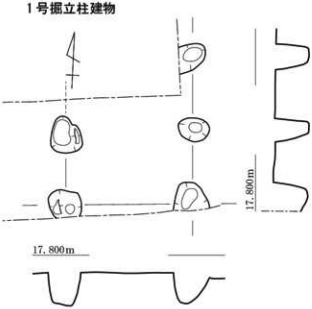
切り合い関係が判断できず、SX01として掘削したため、平面プランは不明である。残存部から、楕円形状を呈すると考えられる。２号土坑を切る。東側は調査区外へと続く。床面に接するように土師器壺、隣接して、転がり落ちたような状態で土師器蓋が出土した。壺の接地面には、ピット状の浅い掘り込みが認められる。出土遺物、掘り方の特徴から火葬墓の可能性がある。土坑内に配石等は見られなかった。

第４層からは、土師器皿が多く出土した。いずれも上面が上を向いており、埋置されたような印象を受ける。埋土に明確な差は見られなかったものの、火葬墓と土坑の切り合いであった可能性は捨てきれない。

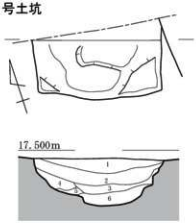
出土遺物

１～４は第４層から出土した。１は土師器坏で、口径15.7cm、器高5.0cmを測る。２～６は土師器皿である。２は口径15.6cm、器高3.0cm、３は口径15.1cm、器高4.1cm。４は復元口径13.9cm、器高3.5cmを測る。５は復元口径12.6cm、器高3.0cm。６は２号土坑出土遺物と接合した。２号土坑最下層出土遺物の可能性がある。復元口径16.2cm、器高2.9cmを測る。７は土師器甕である。器壁外面は剥離する。８は出土状況から９の蓋と考えられる。口径15.1cm、器高4.2cmを測る。９は土師器短頸壺で、口径12.4cm、残存高14.4cm、体部最大径21.2cmを測る。器壁外面は２次被熱により荒れ、全体に器壁が剥離する。調整不明瞭。体部最大径部分に把手の接合痕が残る。

1号掘立柱建物



1号土坑



SK01
1　灰黒色土（黄褐色土ブロックをわずかに含む）
2　灰黒色土（黄褐色土ブロック・土器片をやや多く含む）
3　灰黒色土（土器片をやや多く含む）
4　灰黒色土（黄褐色ブロック・土器片をわずかに含む）
5　淡灰黒色土（黄褐色ブロックを多く含む）
6　灰黒色土、暗褐色土、黄褐色土の混層）

第５図　掘立柱建物・土坑実測図（S=1/40）

４号土坑（第３図）

南北トレンチ南側で検出。平面プランはやや不整形の隅丸方形状を呈する。東西1.4m、南北1.26mを測る。検出面からの深さは42.5cmを測る。床面付近は攪乱が多く、樹木の根による攪乱の可能性がある。

出土遺物

10は土師器鉢である。復元口径19.8cmを測る。

４）不明遺構（SX）

１号不明遺構（第４図　図版５－１、２）

検出時は不定形の土坑と考えていたが、精査の結果、竪穴住居跡、土坑２基の切り合いと考えられる。それぞれ、５号住居跡、２・３号土坑として報告した。

出土遺物

11は、須恵器坏蓋である。５号住居跡に属すると考えられる。１号不明遺構床面直上から出土した。口径15.4cm、器高3.4cmを測る。天井部につまみが付く。12は須恵器坏で、復元口径12.0cm、器高3.5cmを測る。内面底部には焼きぶくれが見られる。外面底部にはヘラ記号が見られる。13は土師器皿である。口径13.9cm、器高3.3cmを測る。内面に×のヘラ記号がある。14は土師器鉢である。３号土坑出土遺物と接合した。高台径12.5cmを測る。

そのほか、ピットからもわずかではあるが出土遺物があった。図示し得たものを報告する。

25は15号ピットから出土した須恵器坏蓋である。宝珠形のツマミ部分のみ遺存する。26は25号ピットから出土した土師器で、短頸壺の底部であろうか、底部はやや丸みをおび、器壁が厚い。

第６図　Ｂ区全体図（S=1/200）

Ｂ区遺構配置図（S=1/200）

２．B区の遺構と遺物

１）竪穴住居跡（SC）

３号住居跡（第６図）

B区東側で検出された。1辺2.18m以上を測り、平面プランは隅丸方形か。深さは検出面から20cm程度。貼床、柱穴等は確認できなかった。検出範囲が狭く、土坑の可能性がある。
出土遺物はいずれも小片のため、図化できなかった。

４号住居跡（第７図　図版３－３）

B区中央やや西寄りで検出された１辺4.20m以上を測る住居跡である。５号土坑を切る。検出面から床面までの深さは10cm程度である。貼り床上面は削平を受けている。柱穴、周壁溝等は検出されなかった。

出土遺物

15は土師皿である。復元口径13.2cm、器高3.9cmを測る。

６号住居跡（第７図　図版３－４，５）

４号住居跡の西側で検出された竪穴住居跡である。１辺4.12m、検出面からの深さは17cmを測る。柱穴、周壁溝等は検出されなかった。
出土遺物はいずれも小片のため図化できなかった。

２）土坑（SK）

５号土坑（第７図　図版３－３、４－６）

４号住居跡に切られる。南側は調査区外へと続く。幅は最大で2.28mを測る。検出面からの深さは24cmである。須恵器坏蓋と土師器鉢が出土した。

出土遺物

16は土師器鉢で、復元口径33.2cmを測る。

３）溝（SD）

４号溝（第６図）

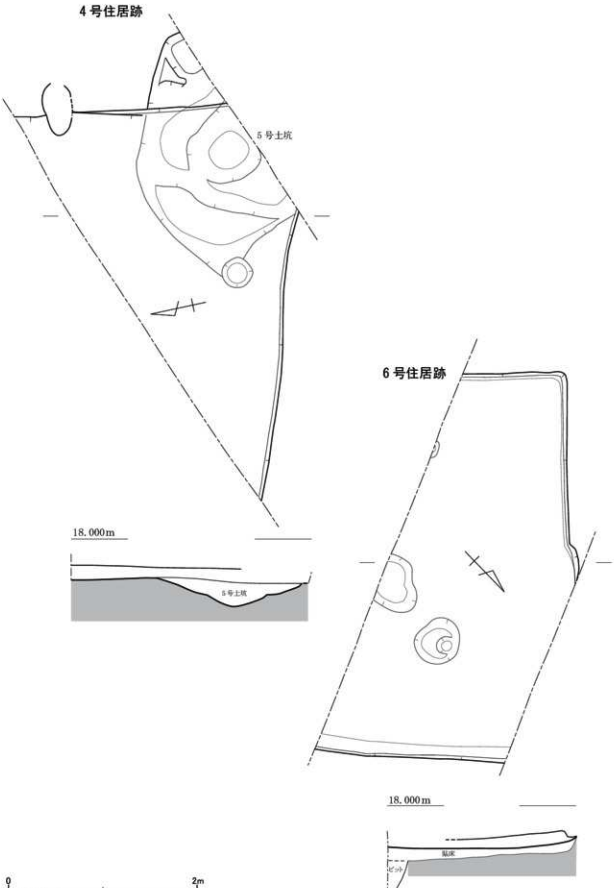
B区東側で検出された溝。北から南へと緩やかに下がる。幅0.54m、検出面からの深さ7cm程度を測る。出土遺物なし。

５号溝（第６・８図　図版５－３）

B区西端で検出された。SX02に切られる。一部未掘である。幅1.74m、検出面からの深さは最大で1.42mを測る。確認できた範囲が狭く、現段階では性格不明である。

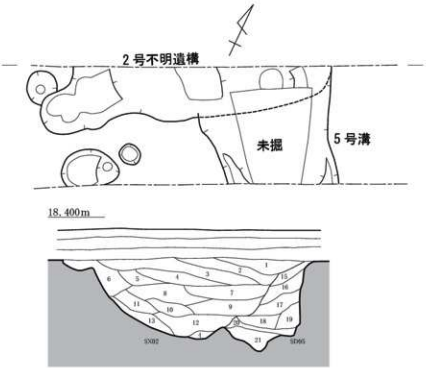
出土遺物

17は土師器甕で、復元口径16.0cmを測る。18は土錘である。全長5.9cm、最大径2.0cmを測る。



第７図　４・６号住居跡実測図（S=1/40）

５号溝・２号不明遺構



1　暗褐色土（土器片を多く含む）
2　暗褐色土（土器片を多く含む，1層より明るい）
3　暗褐色土（土器片を多く含む，2層より明るい）
4　暗褐色土（土器片をやや多く含む）
5　暗褐色砂質土（炭化物をわずかに含む）
6　灰黒色土
7　褐色土（土器片を少し含む）
8　明褐色土（土器片を少し含む）
9　褐色土
10　灰黒色砂質土
11　明黄褐色土と灰黒色土の混層
12　暗黄褐色土
13　暗灰黄褐色土
14　灰黄色粘土
15　暗褐色土
16　灰黒色土
17　暗黄褐色土
18　灰黒色土
19　黒色土と黄褐色土の混層
20　明黄褐色粘土
21　黒色粘土

0　2m

第８図　５号溝・２号不明遺構実測図（S=1/40）

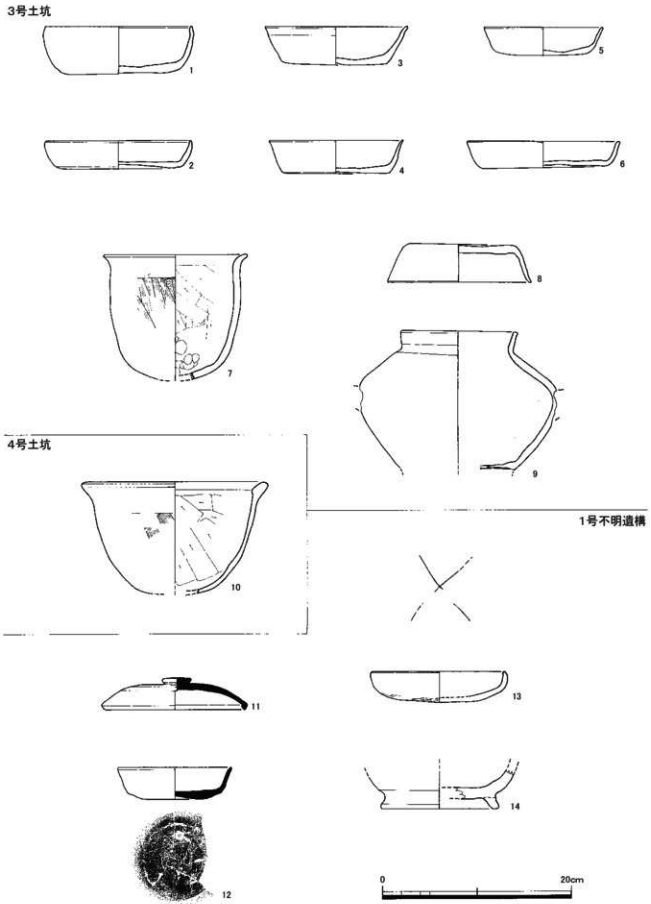
４）不明遺構（SX）

２号不明遺構（第６・８図　図版５－３）

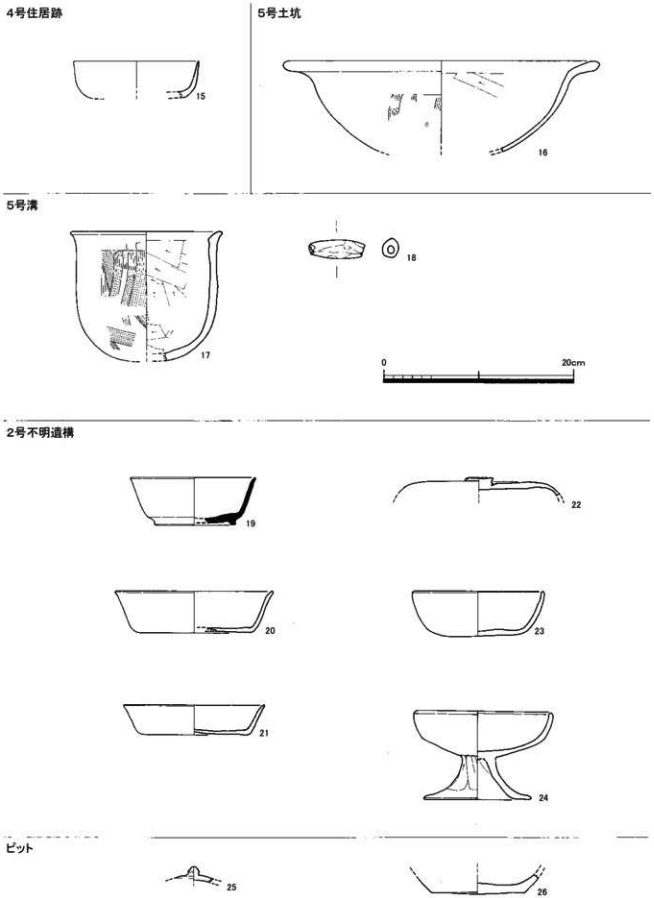
B区西端で検出された不明遺構である。５号溝を切る。長さ4.68m程度と推測される。平面プラン長楕円形を呈する。西側からやや傾斜のついたテラス状の段を設け、東側の床面には、ピット状の窪みが見られる。現状では湧水が見られないが、井戸の可能性が考えられる。

出土遺物

19は須恵器坏である。復元口径13.2cm、器高5.0cmを測る。口縁部は直線的に延び、やや踏ん張る形状の短い高台がつく。20、21は土師器皿である。20は復元口径16.7cm、21は復元口径15.0cmを測る。22は土師器蓋である。23は土師器坏である。復元口径13.9cmを測る。24は土師器高坏である。復元口径14.7cm、器高9.2cm、底径11.3cmを測る。



第９図　Ａ区出土土器実測図（S=1/4）



第 10 図　B 区出土土器実測図（S=1/4）

出土土器観察表

器種：須：須恵器，土：土師器
法量㎝：口：口径，底：器高，頸：頸部最大径，長：全長，幅：最大幅
（ ）は復元径・残存高

	出土遺構	検出面番号	図版番号	器種	法量㎝（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
A区	3号土坑第4層	第9図1	図版6 3	土・坏	口：15.7 底：5.0	内：橙（5YR6/6） 外：橙～浅黄橙（5YR7/6～10YR8/4）	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	口縁端部はわずかに内湾
	3号土坑第4層	第9図2	図版6 4	土・皿	口：15.6 底：3.0	内：橙～浅黄橙（5YR7/6～10YR8/4）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内：回転ナデ 外：ヘラ切り後仕上ナデ	底部はとび底状となる 底部外面に高台
	3号土坑第4層	第9図3	図版6 5	土・皿	口：15.1 底：4.1	内外：橙（5YR6/6）	6mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	器壁外面に大きな刺離
	3号土坑第4層	第9図4	図版6 6	土・皿	口：13.9 底：3.5	内外：橙（5YR6/6）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	器壁外面は一部剥離
	3号土坑	第9図5	図版6 7	土・皿	口：12.6 底：3.0	内外：にぶい橙（7.5YR6/4）	0.5mm以下の砂粒をごくわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	内面底部のナデはハケメ状の条痕が強く残る
	3号土坑（2号土坑）	第9図6	図版6 8	土・皿	口：16.2 底：2.9	内外：橙（5YR6/6～7.5YR7/6）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ後仕上ナデ	2号土坑出土遺物と接合
	3号土坑	第9図7	図版6 9	土・皿	口：15.2 底：13.1）	内外：橙～褐灰（5YR6/6～5YR5/1）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内：ケズリ，指オサエ 外：ハケメ後ナデ	器壁外面に刺離あり 底部付近に高台
	3号土坑	第9図8	図版6 2	土・皿	口：15.1 底：4.2	内：橙（5YR6/6） 外：橙～黄橙（5YR7/6～10YR7/6）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	出土状況から短頸壺の蓋と考えられる
	3号土坑	第9図9	図版6 2	土・短頸壺	口：12.4 頸：21.2 底：14.4）	内外：橙～浅黄橙（5YR7/6～10YR7/4）	8mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	器壁剥離 体部に把手の接合痕 底部は大き刺離
	4号土坑	第9図10	図版6 10	土・鉢	口：19.6 底：11.7）	内：橙（2.5YR6/6） 外：明黄褐（10YR7/6）	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：ナデ 体：内：ケズリ，ナデ 外：ハケメ，ナデ	内外器ともに器壁マメツ 調整不明瞭
	1号不明遺構	第9図11	図版7 1	須・坏蓋	口：15.4 底：3.4	内外：灰（N6/0）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	5号住居跡に属すると考えられる 口縁端部は面取状 やや歪み あり
	1号不明遺構（3号土坑）	第9図12	図版6 1	須・坏身	口：12.0 底：3.5	内外：灰（N4/0）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	底部外面にヘラ記号 底部内面に焼きぶくれ 3号土坑出土遺物と接合
	1号不明遺構	第9図13	図版7 3	土・皿	口：13.9 底：3.3	内外：橙（7.5YR6/6）	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ 底：内：仕上ナデ 外：ヘラケズリ	底部内面に×の眼いヘラ記号
	1号不明遺構（3号土坑）	第9図14	図版－	土・鉢	口：－ 底：（4.2） 高台：（2.5）	内：浅黄橙（10YR8/3） 外：にぶい黄橙（10YR6/4）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：－ 体：内外：回転ナデ	3号土坑出土遺物と接合
B区	4号住居跡	第10図15	図版7 6	土・坏	口：13.2 底：（3.9）	内外：橙（7.5YR6/6～7.5YR7/6）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内：回転ナデ 外：ケズリ後ナデ	器壁マメツのため調整不明瞭 ケズリの単位不明
	5号土坑	第10図16	図版7 9	土・鉢	口：（33.2） 底：（9.6）	内：橙（2.5YR6/6） 外：橙（7.5YR6/6）	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内：ケズリ，ナデ 外：ハケメ，ナデ	口縁部の歪みが大きい 器壁マメツのため調整不明瞭
	5号溝	第10図17	図版8 8	土・壺	口：（16.0） 底：（13.6）	内外：橙（5YR6/8）	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内：ケズリ 外：ハケメ	器壁内面ややマメツ 調整不明瞭
	5号溝	第10図18	図版8 9	土・土錘	長：5.9 幅：2.0	浅黄（2.5Y8/4）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	外：ナデ	マメツのために調整不明瞭
	2号不明遺構	第10図19	図版1 1	須・坏	口：（13.2） 底：5.0 高台：0.6	内外：灰白（5Y7/1）	2mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ 底：外：仕上ナデ	
	2号不明遺構	第10図20	図版2 2	土・皿	口：（16.7） 底：4.4 高：（11.6）	内外：橙～明黄褐（5YR6/6～10YR7/6）	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	一部に器壁の剥離あり
	2号不明遺構	第10図21	図版3 3	土・皿	口：（15.0） 底：3.2	内外：橙（5YR6/6）	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ 底：内：仕上ナデ 外：ヘラ切り後仕上ナデ	
	2号不明遺構	第10図22	図版3 4	土・坏蓋	口：－ 底：（2.0） ツ：2.9	内外：橙（5YR6/6）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ ツ：回転ナデ	内外器ともに仕上ナデが丁寧に施される
	2号不明遺構	第10図23	図版3 5	土・坏	口：（13.9） 底：4.8	内外：橙（5YR6/8）	0.5mm以下の砂粒をごくわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ 外：ケズリ後ナデ	器壁マメツにより外器の調整不明瞭
	2号不明遺構（5号溝）	第10図24	図版3 6	土・高坏	口：（14.7） 底：9.2 高：11.3	内外：橙（5YR7/8）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内：ナデ 外：ケズリか 脚：内：シボリ 外：ケズリ	5号溝出土遺物と接合
A区	15号ピット	第10図25	図版－	須・坏蓋	口：－ 底：（1.7） ツ：1.2	内外：灰（N4/0）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	内外：回転ナデ	断面は灰褐色を呈す
	25号ピット	第10図26	図版－	土・短頸壺か	口：－ 底：（2.2） 高：（9.6）	内外：にぶい橙（7.5YR7/4）	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	内外：回転ナデ	器壁が薄い

3．C～G区の遺構と遺物

C～G区は、調査区の低地部分にあたり、北側の薬師堂東遺跡から続く谷部が形成されている。試掘調査の結果、遺構面への影響は想定されなかったが、谷部の拡がりを確認する目的でトレンチ調査を行った。ここでは、各トレンチの状況を報告する。

C区は総延長14.4mでやや起伏に富む地形を残す。台地からの落ちと谷部を確認した。一部は昭和60年度に九州横断自動車道建設に伴い調査された高松家墓地に隣接する。高松家墓地の高台がわずかに残るが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

D区は総延長63.6mを測り、谷部にあたる。埋土は暗灰黒色粘土が厚く堆積し、耕作に伴う排水パイプ、下層からは谷部埋没後の葦が多量に出土した。

E区は総延長61.2mを測る。谷部に当たりD区と同様の埋土である。

F区は排水溝設置予定箇所である。総延長32.4mを測る。谷部にあたり、著しい湧水のため、埋土の状況を詳細に観察できなかったが、D、F区と同様の埋土である。

G区は、調査区南端に位置する。試掘調査時には、まだ耕作に伴う水が張られており、遺構面の検出がままならず、掘削を断念している。総延長26.4mのトレンチ調査を実施した。ここでは、谷部が見られず、耕作土直下が明黄褐色粘土の地山となる。

C～G区で出土遺物は確認できなかった。

第5章　調査の成果

1．蔵骨器

周辺地域で土師器短頸壺を採用した蔵骨器は確認できていない。いずれも須恵器である。3号土坑から出土した土師器壺は、器形から、須恵器模倣の蔵骨器と考えられる。須恵器との形態比較で言うと8世紀前半頃の所産か。特徴として、外面の被熱および、高台部の剥離が挙げられる。

内部の堆積物は精査を行ったが、骨片等は確認できなかった。積極的に蔵骨器と言える根拠は乏しい。

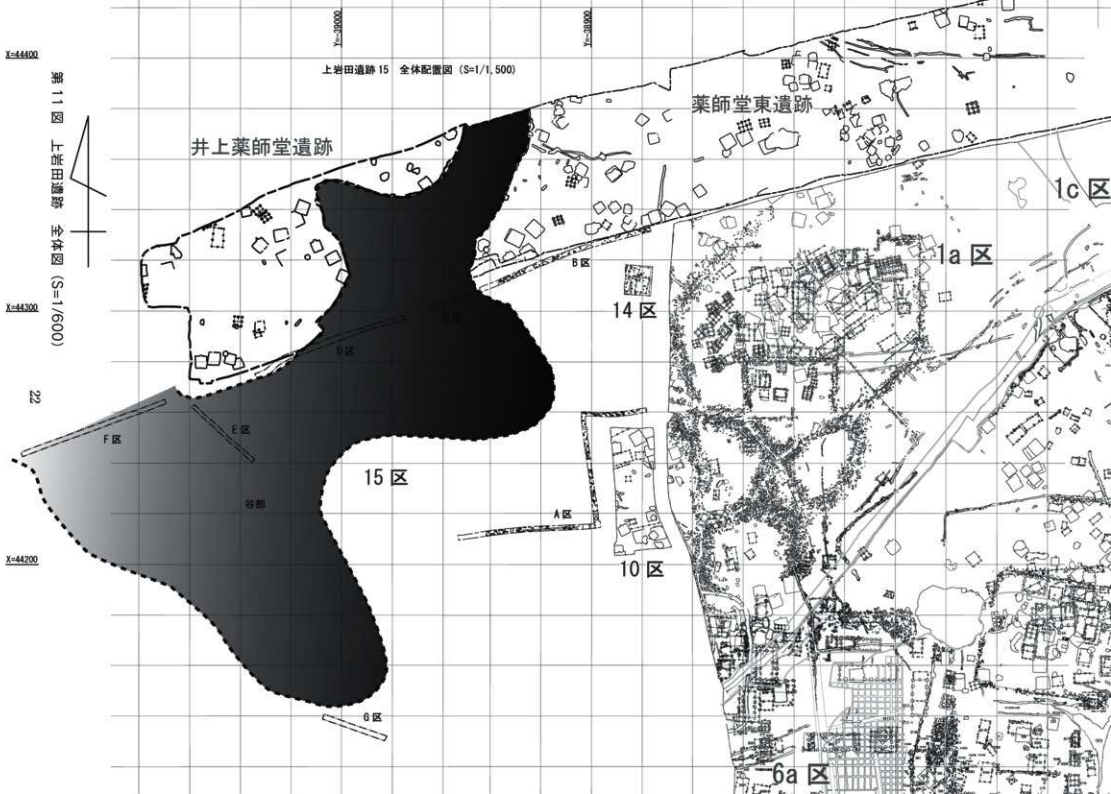
2．谷部

井上薬師堂遺跡、薬師堂東遺跡の間に位置し、本調査区の立地する台地と西側の台地とを隔てる谷部である。

長者堀と地名の残る谷部であるが、本調査によって、南側で開口しない（G区）ことが明らかとなった。ただし、低湿地状にはなっていたものと考えられ、下流域には「牟田」の地名が残り、石原川へと繋がる。井上薬師堂遺跡では、大溝として報告（緒方1987）されており、「ほとんど流水がなく、滞水状態を長く続けていたことが確認」されている。本調査は、この滞水状態を裏付ける成果を得た。

参考文献

井上裕弘、緒方泉、木村幾太郎、児玉真一、倉住靖彦、畑中賢一、野井英明、林弘也　1987『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』10（福岡県教育委員会）
中間研志、森山栄一、小田和利、平嶋文博　1988『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13
小田和利ほか　1990『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』16



第 11 図 上岩田遺跡 全体図 (S=1/600)

図　版

1．調査区全景（西から）

2．調査区遠景（西から）

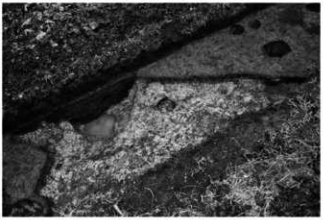
図版２

１．Ａ区全景（上空から）

２．Ｂ区全景（上空から）

１．１号住居跡（東から）

２．２号住居跡（東から）



３．４号住居跡・５号土坑（北東から）

４．５号住居跡（東から）

５．６号住居跡土層（北から）

６．１号掘立柱建物（南から）

1．1号土坑（西から）

2．1号土坑土層（西から）

3．3号土坑（西から）

4．3号土坑土層（西から）

5．3号土坑土器出土状況（南から）

6．5号土坑土層（北から）

1号不明遺構

図版6

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版8

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみいわたいせき15
書名	上岩田遺跡15
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第321集
編著者名	龍孝明
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 ℡0942-72-2111
発行年月日	2018(平成30)年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみいわたいせき15 上岩田遺跡15	おごおりしかみいわた・いのうえ 福岡県小郡市上岩田・井上	40216		33°24′05″	130°34′40″	2016.08.01 ～ 2016.09.30	589.8㎡	駐車場

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上岩田遺跡15	集落跡 散布地	古代	竪穴住居跡 土坑、溝	須恵器、土師器	

要約

本調査区は、国指定史跡小郡官衙遺跡群上岩田遺跡の指定範囲から、北西側約120mに位置する。調査範囲の西側は谷部となっており、東側の台地縁辺部に古代を中心とした遺構が確認できた。検出された遺構は竪穴住居跡6軒、掘立柱建物1棟、土坑5基、溝5条、多数のピットである。3号土坑は火葬墓の可能性があり、土師器短頸壺が出土している。

西側の谷部は南側へと開口せず、埋土から滞水していた状況がうかがえる。

上岩田遺跡15

小郡市文化財調査報告書 第321集

2018年3月30日

発行 小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園1-8-15